

長野県ササ類地図 (6)

諏訪地域北西部のササ類相

三樹 和博*

はじめに

諏訪盆地は長野県のほぼ中央に位置し、その底面には諏訪湖（標高 759m）の湖面が広がっている。諏訪湖周囲の平野部から周辺の山麓部まで、ほぼ全域に開発が進んでおり、湖の北西端を源に天竜川が南流している。盆地周縁部にはフォッサマグナの断層群が走り、南西縁や北西縁には湖岸断層が発達している（清水 1997）。今回調査地域としたのは岡谷市、塩尻市、辰野町にまたがる諏訪盆地北西部に標高 1000m 前後で連なる塩嶺地域の一部である。

諏訪盆地の東側に位置する八ヶ岳山麓の標高 1000m 前後のササ類相は、ミヤコザサ節 *Sasa* sect. *Classinodi* の分布で占められている（三樹 2015, 2019）。冬季の積雪も少なく、内陸型の乾燥や低温にさらされる諏訪盆地周辺においても、同様のササ類相が推測された。

諏訪地域のササ類の分布について井口（1987）の記録があるが、東部山地を中心とした記録にとどまっている。

調査地域と方法

諏訪湖から、国道 20 号線で北西に向かって 200m ほどの標高差を一気に駆け上がると塩尻峠につく。そのやや手前あたりが勝弦峠から小野峠に通じる塩嶺王城パークラインの起点となっている。このパークラインの沿道を小野峠の南にあるシダレグリ森林公園付近までを中心に調査した（図 1）。沿道には所々に行楽施設などが点在するが、カラマツやヒノキなどの植林を交え、ミズナラなど広葉樹を中心とした二次林がややまばらに連続している。調査は 2019 年 10 月 27 日に行った。ササ類の同定は小林（2017）・Kobayashi（2019）に準拠して行い、確認した種は証拠標本として長野県環境保全研究所（NAC）に収めた。

結果と考察



図 1. 調査地域図



図 2. ニッコウザサ群落

国道 20 号線から西へ、パークラインの起点の先にある鳥居平やまびこ公園の東側では（図 1-①）、ニッコウザサ *S. chartacea* Makino var. *nana* Sad. Suzuki を確認した（図 2）。再びパークライン本線に戻り勝弦峠から南西への道を辿って行くと、しばらくは比較的平坦な尾根状の道が続き、ニッコウザサの分布がその沿道に断続的に続いている。旧中山道の小野峠が近くなると（図 1-②）、やや葉幅の広い一群が出現する（図 3-A）。ミヤコザサ節の種のようにも見えるが、地上部で分枝を行う程がわずかに見られ、節間も短めである。また地上部の程鞘を

* 三樹 和博 〒252-0173 神奈川県相模原市緑区小原 859

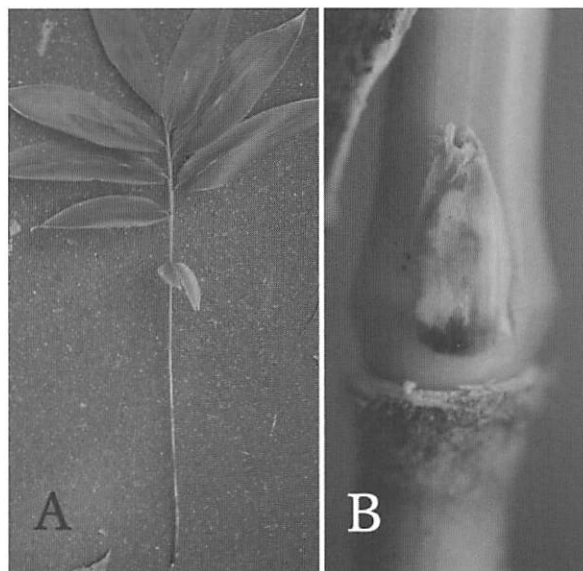


図 3. A: ミヤマクマザサ×ニッコウザサ地上部.
B: 未熟な腋芽.

除去してみると、未熟な腋芽が所々の節に存在しており（図 3-B）、これは八ヶ岳地域でのミヤマクマザサ *S. hayatae* Makino × ニッコウザサと推定される交雑個体においても観察された（三樹 2019）。2 年ほど前にこの付近を通りかかった際、開花中のササの一群を発見し、ミヤマクマザサの開花であったことを記録している。本調査時にその場所を訪れると、枯死した程はすでに残骸が倒伏してしまっていた。付近には、枯死した一群以外にミヤマクマザサの生育は確認できず、本調査での確認種とするには至らなかった。しかし、現在この周辺に生育するものは、八ヶ岳地域で両親種とともに確認したミヤマクマザサ×ニッコウザサに形態的特徴が類似しており、未熟な腋芽が付属するといった共通点もあり、同じ組み合わせの交雑個体であると推測された。

その地点の先には小野峠へと通じる山道が分岐しており、入口付近には（図 1-③）、上部分枝した枝と葉の形状などからアマギザサ節 *S. sect. Moniliclae* の種のようにも見えるササが生育していた（図 4）。しかし、節は平坦に近く、枝先の葉の枚数も 3 枚前後と少なくスズザサ属 *Neosasamorpha* のツクバナンブスズ *N. tsukubensis* Sad.Suzuki と考えられた。スズザサ属はスズダケ属 *Sasamorpha* とササ属 *Sasa* のいずれかの種を両親種にもつ雑種起原の分類群と推定されている。ここで確認したものは、典型的なツクバナンブスズに比べ、かなりずんぐりした幅の広い葉を持つことから、上記のミヤマクマザサが関わった可能性が示唆された。またそこから 100m 程先には（図 1-④）、ミヤコザサ - チ



図 4. ツクバナンブスズ地上部

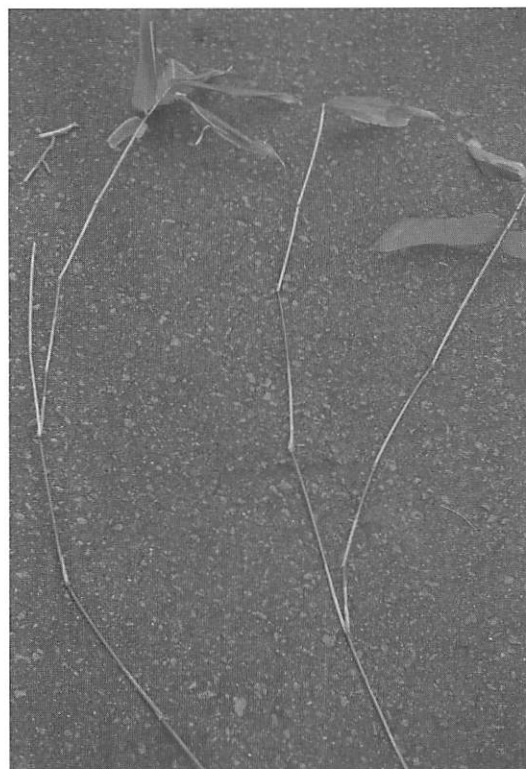


図 5. ミヤコザサ - チマキザサ複合体地上部

マキザサ複合体 *S. sect. Crassinodi-sect. Sasa* hybrid complex と考えられるササ（図 5）の群落が広がっていた。葉質は紙質で、非常に柔軟な程の節は太り、節間は長めで地上部分枝を伴うといった特徴をよく表していた。これはミヤコザサ節とチマキザサ

節 *S. sect. Sasa* のいずれかの種を両親種とし、隣接する個体群間で浸透交雑を繰り返して形成されたもので、ミヤコザサ節とチマキザサ節の種が隣接する場所では頻繁に出現する (小林 2011, 2017)。しかしここでは、片親であるチマキザサ節の種の分布は確認できなかった。

本調査の範囲は諏訪盆地西部のほんの数キロの区間であったが、出現したササ類 4 種のうち 3 種までが推定雑種起原の分類群であった。それら雑種起原と推定された個体の親種の中でミヤマクマザサについては、枯死以前の開花時にかりうじて確認していたが、スズダケ属やチマキザサ節の何らかの種の分布を同一地域内で見ることがなかった。スズダケ属の分布に関しては、かつてこの地域が採草地や牧草地として人為的に利用されていた時代を経ているため (諏訪の自然誌・植物編編集委員会 1981)、林床環境を生育適地とするスズダケ属の生育を可能とする森林環境の消滅により、スズダケ属の分布も消滅した可能性もある。この地域のようなササ類相を示す場所は各地で見られ (小林 2011)、交雑個体の親種が必ずしも近くに生育していないケースも多い。数十年に一度の頻度で起こる開花による枯死や、人為による環境の改変、火山噴火や気候変動など様々な要因による影響、また近年目立ってきたシカによる菜食圧などは、栄養繁殖を繰り返し、永続されているように思われがちなササ類の分布状況を大きく変動させているのかもしれない。またそれらの攪乱が個別に、あるいは複合的に負荷された場合、隔離機構の破壊や、部分的な開花の促進など、ササ類の交雑自体を促進している可能性もある (三樹 2009, 柴田 2010)。

メダケ属 *Pleioblastus* については、集落周辺でアズマネザサ *P. chino* Makino やトヨオカザサ *P. humilis* Nakai の生育地が点在しているが、人家のまわりに極限され、構造物を境とする地点も多く、攪乱に高い耐性を持つ分類群であることを考えると不自然な現状でもある。天竜川の上流部一帯をたどってみても数か所で同様の生育が確認できたに過ぎず、自生分布を匂わす状況ではなかった。メダケ属の種は、かつて上壁の小舞竹の材料とするなどの目的で各地に植えられた経緯もあり、本調査では国内移入として扱った。因みに、標高が 200m 程度低い隣県の甲府盆地周辺では、アズマネザサなどが豊富に自生しているが、長野県境付近でミヤコザサ節の分布域へと移行する (三樹 2015)。

諏訪盆地周辺のササ類相は、ミヤコザサ節の種を中心に、アマギザサ節やチマキザサ節、スズダケ属などが関わったと推定される雑種起原の分類群などから構成されることが確認された。

証拠標本

ニッコウザサ：長野県岡谷市やまびこ公園東側。Oct.27. 2019. K.MIKI. NAC194008.

ツクバナンブスズ：長野県塩尻市大字北小野。Oct.27. 2019. K.MIKI. NAC194009.

ミヤコザサ - チマキザサ複合体：長野県辰野町大字小野。Oct.27. 2019. K.MIKI. NAC194010.

ミヤマクマザサ×ニッコウザサ：長野県辰野町大字小野。Oct.27. 2019. K.MIKI. NAC194011.

引用文献

- 井口哲夫 (1987) 諏訪地方におけるササの分布 (第一報). 自然研究紀要 22: 83-88.
- 小林幹夫 (2011) 日本産タケ類における推定雑種分類群の存在意義と識別法. 東北植物研究 16: 1-15.
- 小林幹夫 (2017) 日本のタケ亜科植物. 北隆館. 東京.
- Kobayashi M. (2019) Nomenclatural Novelties *Poaceae* Subtribe *Arendinariinae* in Japan. J. Jpn. Bot. 94(4): 242-254.
- 三樹和博 (2009) 箱根火山の活動とヤマキタダケ (アズマザサ属) のなりたち. 富士竹類植物園報告 53: 51-60.
- 三樹和博 (2015) 長野県ササ類地図 (1) ハケ岳をめぐる二つの交雑帯. 長野県植物研究会誌 48: 5-8.
- 三樹和博 (2019) 長野県ササ類地図 (5) ハケ岳周辺のササ類相 (追補). 長野県植物研究会誌 52: 9-11.
- 柴田 昌三 (2010) タケ類 *Melocanna baccifera* (Roxburgh) Kurz ex Skeels の開花 その記録と 48 年周期性に関する考察. 日本生態学会誌 60: 51-62.
- 清水建美 (1997) 長野県植物誌. 信濃毎日新聞社. 長野.
- 諏訪の自然誌・植物編編集委員会 (1981) 諏訪の自然誌 植物編. 諏訪教育会. 長野.